カトリック仙台教区報

2013年1月6日　No.209
発　行
カトリック仙台司教区
〒980-0014
仙台市青葉区本町 1-2-12
Tel(022)222-7371 Fax(022)222-7378
発行責任　広報委員会
URL http://sendai.catholic.jp/

新年とご降誕のお慶びを申し上げます。

2013年 年頭書簡
「わたしたちは主においてひとつ」

司教　マルチノ　平賀　徹夫

仙台教区の皆さま、2011年3月11日の東日本大震災から丸2年目となる2013年を迎えました。今なお数十万人とも言われる、被災し避難生活を余儀なくされている方々に思いを馳せると同時に、全世界のカトリック教会と共に「信仰年」を過ごしている中で迎えた新年です。年頭に当たり、昨年の仙台教区を振り返るとともに、「信仰年」開催の告示文書であるベネディクト16世教皇の自発教令『信仰の門』に学びながら、この新しい年に向かう私たちの歩みについて少し考えてみたいと思います。

教区年の実りと大震災復興支援

昨年は、私たちの教区の名称が函館教区から仙台教区へと改称されて75年となることを記念しての「教区年」を祝った一年でした。

東日本大震災という大かん難のさなかにあって開いていいものだろうかとの声もありましたが、そういう状況であればなおさら、「わたしたちは主においてひとつ」を確認することの意義も大きいだろうということでの「教区年」開催でした。

「教区年準備委員会」では教区の絆を確認すべく「ローソクリレー」と「スタンプラリー」を企画し、それは教区全体の協力のもとに見事に達成されました。そして、最大の行事として宮城・福島・青森・岩手の順で県大会が開かれました。例年と同じように各県ごとの開催でありましたが、その準備は、四県のどこでも《仙台教区の私たち》という強い意識のもとに進められ、本番では本当に良い実を結びました。今までにない大きな規模での県境を超えた交流が図られ、こうして「わたしたちは主においてひとつ」を共に味わう素晴らしい教区年を祝うことができたのでした。

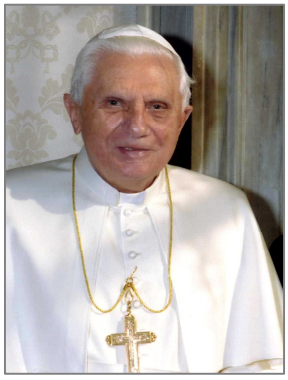
このことをまず神様に感謝いたしたいと思います。そして「主においてひとつ」を体験した私たちがその喜びを大きなバネとし、教会としての存在意義をより広く表すように、いっそう心を込めて、大震災の苦しみの中におられる多くの被災者への支援を続けたいと思います。これまでと同様、祈りながら、そして協力して手を差し伸べながら、苦しんでいる人々に寄り添い続けたい。「現代人の喜びと希望、悲しみと苦しみ、特に、貧しい人々とすべて苦しんでいる人々のものは、キリストの弟子たちの喜びと希望、悲しみと苦しみでもある（現代世界憲章1）」と宣言した教会の姿勢を、表し続けたいと思います。日本のカトリック教会全体が、今年も仙台教区をそして被災地の支援を力強く継続してくださいます。その支援に感謝しまた力づけられながら、私たちは仙台教区として、東日本大震災・復興支援の「新しい創造」基本計画第3期の活動に向けて力強く進んで参りましょう。

生命の泉

いつ頃からかクリスマスには各地の街はイルミネーションで彩られる。どんどん派手になって買い物で忙しい人の気晴らしだ▼数年前ご降誕直後にアビニョンの大通りを歩いた。軒先の年代物の金具に吊るされた小さな電球がボンヤリ灯り続けていた。とっぷりと日が暮れて月を背にした旧教皇庁舎の大きな建物は黒い影を落とし街中のスーパーはまだ営業中なのにひっそりとして歩いている人影はまばらだった▼街中のまばゆさは買い物客の目を楽しませるが、小さなツリーでも家の中になければさみしい。プレゼントは勿論、飾りもごちそうも外注になってしまえばしみじみと落ち着く場所はどこにもないことになる。こんなクリスマスはわたしたちに何を語りかけてくるだろうか▼絆が損なわれていたと気付いたのは大震災によってだった。地方の青年が都会に出て核家族を作り、親子だけの濃密な家庭が理想だった。今、そんな家庭から自己表現を求めて若者が旅立つ。豊かで気楽さの中で育ち、追い求める価値も見出せないまま独りぼっちで生きていこうとしている▼目と目を合わせて会話をする面倒を避けてネットでバーチャルな友だちを求めてしばしの気休めをするが、そこでも友だちを得られなければ秋葉原事件の加害者と等身大の青年が輩出される▼「人は独りでは生きられません」というメッセージはご降誕の主要なテーマではなかったか。（守）

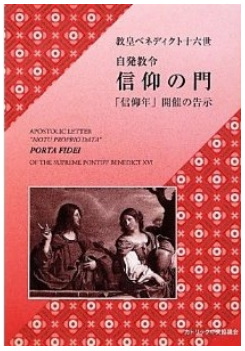
教区の新しい地区割り

私たちは教区年を通して「わたしたちは主においてひとつ」を体験し、また、大震災救援活動に携わる中で力を合わせて働くすばらしさも経験しました。一方では、教区の人員の高齢化や司祭数の減少という現実もあります。そこで今、私たち仙台教区がより力を合わせて救いの喜びを生き、その良い便りを告げる使命を果たす教会であり続けるために、教会（小教区）同士がもっと有機的につながって協力し合う体制への「地区割」ができないか、を考えているところです。司祭派遣については、一つの小教区に（一人の）司祭を、ということはもうありえません。近隣の小教区群がつながりを強めてそのグループを「地区」と呼び、そこに司祭を派遣し、その地区の信徒、修道者、司祭全員で協力する体制を目指そうという考えです。仙台教区を12のグループ（地区）に分けるという最初の案は昨年（２０１２年）２月に発表されましたので皆さまご覧になったかと思いますが、司祭評議会および宣教司牧評議会で取り上げられ話し合われてきました。そして、小教区での話し合いもお願いしてきました。昨年12月初めには仙台教区の全司祭の集いが開かれ、そこでは12（地区）より14（地区）ではどうかという案も提案されましたが、仙台教区内で散在している小教区の現状や、教会関係の教育施設や社会福祉施設などの事業所のこともできれば考慮に入れながら、地区の数をもっと少なくする（その地区の範囲は広く、小教区数は多くなる）のがよいか、もっと多く（小教区数を少なく）するのがよいか、信徒・修道者の皆様のいろいろなお考えもお寄せいただきたいと思います。将来、地区の見直し等がありうるのは当然のことです。教区の宣教司牧評議会定例会は３月と９月に開催されますので、遅くとも今年の９月（秋分の日）の会議に向けて各県からの意見として提案していただけるとありがたいです。



信仰年

ベネディクト16世教皇は２０１１年10月『信仰の門』という題名の教令を発布し、「２０１２年10月11日に始まり２０１３年11月24日の王であるキリストの祭日までの期間を『信仰年』とする」と宣言されました。その中で教皇は、「イエス・キリストはいつの時代にも教会を呼び集め、つねに新たな命令をもって福音を告げ知らせる使命をゆだねます。現代においても、信じることの喜びと、信仰を伝える熱意を再び見いだすために、教会が新しい福音宣教に強力に取り組む必要があります」と鼓舞しています（『信仰の門』７）。そのためにということでしょうが、第２バチカン公会議の公文書を読み直すことと、信仰の力とすばらしさを示すものであり信仰教育に役立つ道具である（『信仰の門』４参照）『カトリック教会のカテキズム』を学び直すことを勧めています。『カトリック教会のカテキズム』は大冊で骨が折れますけれども、すでに着手しているグループもあると聞こえてきていますし、皆さま、どんどん挑戦してみてはいかがでしょうか。第２バチカン公会議の公文書は16文書あって全部を読むとなるとこれも大変ですが、特に、上にその第１項を引用した『現代世界憲章』および『教会憲章』はぜひ読みたいものですのでお勧めいたします（なお公会議公文書は改定訳が今春、カトリック中央協議会から発行される予定です）。



教皇はまた、「信仰によって、数知れないキリスト信者は正義のためのわざを行い、主のことばを実践しました。主は、圧迫されている人を自由にし、すべての人に恵みの年を告げるために来られたからです（ルカ４・18-19参照）」とも指摘し（『信仰の門』13）、「信仰年は愛のあかしを深めるためのよい機会でもあります。愛の伴わない信仰は実りをもたらすことがありません」（同14参照）と、具体的な行動の必要性を教えています。これも大震災被災者への支援活動をはじめ、私たちの心がける具体的な働きを価値付けていただくことばとして受け止めたいと思います。

結び

新しい年が始まりました。今年も私たちの前に難しい問題が次々と立ち現われてくるのでしょうか。もしそうならそれも引き受けましょう。ベネディクト16世教皇は『信仰の門』の結びである第15項で「キリスト以外に、未来に向かうための保証、真実で永遠の愛の保証はない」と言明しています。全く同感するものです。その主キリストを私たちの希望の唯一のよりどころとし、その方にいつもたち帰りながら、「わたしたちは主においてひとつ」を、今年も祈りのうちに歩んで参りましょう。

聖母の取り次ぎを願いながら、この新しい一年、父と子と聖霊の恵みが、仙台教区の皆さまの上に豊かに注がれますようにとお祈りいたします。

２０１３年１月１日

司教日程　1月・2月

1・1㊋ 神の母聖マリア 元寺小路教会
8㊋ 司祭評・役・司祭団・役
13㊐ 北仙台教会
19㊏ 宣教司牧評役員会
信仰養成講座
25㊎ 仙台教区サポート会議
教区・人権を考える委員会
28㊊ 司祭団月例会
29～1 司教の社会問題研修会
2・8㊎ 部落差別人権委・事務局会議
10㊐ 仙台壮年の会
12㊋ 教区司祭団役員会
司祭評定例会
16㊏ 宣教司牧評役員会
18～22 臨時司教総会
23～24 部落差別人権委・合宿
25㊊ 県別司祭の集い
28㊍ 仙台教区サポート会議
教区責任役員会

仙台教区「新しい創造」基本計画・第３期　2013.4～2016.3

カトリック仙台教区　平賀徹夫司教は、２０１２年12月８日付で、「東日本大震災救援・復興活動にかかる『新しい創造』基本計画第３期に向けて」を全国に発表した。第３期は、２０１６年３月までの３年間とし、特に、被災者の精神的ダメージのケア、コミュニティ形成支援の継続と、福島支援のため、仙台教区サポートセンターの「福島デスク」の新設、滞日外国人の支援をも教区内で検討するなどの取り組みが計画されている。

全国の皆様
東日本大震災救援・復興活動にかかわる
「新しい創造」基本計画
第３期に向けて

カトリック仙台司教区
司教　平賀徹夫

東日本大震災から１年９ヵ月が過ぎようとしています。これまで日本全国からそして全世界から寄せていただいた温かい善意は、未だ止まることなく仙台教区と被災した方々を包んでくださっています。心より厚く御礼申し上げます。

大震災直後、復興への基本計画を策定するにあたり、わたくしはモットーをパウロ書簡の「キリストと結ばれる人はだれでも、新しく創造された者なのです」（２コリント５・17）から選びました。そしてわたしたち仙台教区は、広い被災地と被災されたたくさんの人々を視野に置きながら、その中でも特に「谷間」におかれた地域やそこに暮らす方たちの心を生き、励まし、つなぎ、支え、寄り添う教会であることを望みました。日々「キリストと結ばれ、新しく「創造された者」として支援活動に携わりながら、支援する側、される側の壁を取り払い、「主においてひとつ」となることができると考えたからです。実際、この１年９ヵ月の歩みはわたしたちの教会に大きな恵みをもたらしました。それは活動に参加した方々とその報告を受けた方々の一致した福音体験から明らかです。本当に喜ばしいことです。

しかしながら、被災者の今を考えますと、心の傷は少しずつながらも癒され、当初の苦しみ・悲しみからは落ち着きを取り戻しつつあるようにも見えますが、将来に向けての不安から、新たな悩みや苦しみが始まっていることも隠しようのない事実なのです。被災地の現状はまだまだ復興とは程遠い状況であることを正面から受け止めねばなりません。

この現状を前にし、復興支援活動の第３期を以下のように計画しました。

第３期の期間

「新しい創造」基本計画で掲げた柱Ⅰ「仙台教区サポートセンターの活動」について、震災発生時から半年後の２０１１年９月15日までを第１期（避難所への支援）、そしてその後から２０１３年３月末までを第２期（仮設住宅・見なし仮設に移られた被災者への支援）としました。この活動を長期にわたって取り組む覚悟ではありますが、一応、**第３期は２０１３年４月から２０１６年３月末**までの３年間とします。

この第３期には、
①国の計画や被災自治体の復興計画に進捗度の差があっても、被災者の生活の場は仮設住宅から災害公営住宅（復興住宅）へと変わる時期と重なります。
②福島県内では、少なくともあと２年間は仮設住宅、その後、町外コミュニティを経て、故郷に戻れるのは早くても５年以上先という状況です。支援先の仮設住宅の統廃合、移転等も考えられます。

第３期の活動目標

１．第３期の活動内容は、第２期・柱Ⅰの中で掲げた項目、すなわち①生活の再建、②経済的自立の支援、**③精神的ダメージのケア、④「コミュニティ形成支援」**のうち、特に③と④を継続して行うことを基本とします。

●「精神的ダメージのケア」は、今後も続けておこないます。被災当時のことを今も話すことができない方もおられる中で、今後の生活への不安という新たな苦しみが生まれています。特に福島県では、国や東電が確かな復興への道筋を示さないことへの憤りが被災者を苦しめています。

●傾聴活動の効果は精神的ダメージのケアだけにとどまらず、被災した方々の現状に直結したニーズや将来の街造りに必要となる復興の種を見いだすことにも繋がります。そして何よりも、わたしたちの支援活動はこれからも被災者、被災地に寄り添うことを基本としたいと思いますし、その根幹が傾聴活動だと考えております。

●被災者の生活の場は避難所から仮設住宅へと変わり、さらに災害復興住宅へと変わっていきます。避難所でせっかくできた絆は仮設へと移行した際に寸断されました。今後の災害復興住宅への移行時にも同じことが懸念されています。

●仮設の「弱者」が取り残されていくことが予想されます。こうした「弱者」を大切にし、地元の人が中心になって立ち上がってきている支援活動に協力しながら「コ

ミュニティの形成」を支援していきます。

2．柱Ⅱの「4から6、45計画」については、小教区や信徒グループの自発的な活動を推進していきます。

●内陸部の教会が沿岸部で津波の被害を受けた沿岸部の教会を支援し、交流を深める活動を今後も推進していきます。

●特に福島の問題については仙台教区サポートセンターの「福島デスク」を新たに開設し、

①福島県内の各小教区・グループの活動調整と情報の共有を図り

②福島県の現状、各小教区・グループの活動報告を世界・県内外の支援者へ発信します。

③福島県内外、また海外からも福島県のために活動している小教区・グループ等の連携を促進します。

●滞日外国人支援についても教区内で検討し、被災地を優先し、今後福島県でのコミュニティ支援も推進します。

おわりに

被災された方々一人ひとりに寄り添う活動を基本にした私たちの歩みは、心からの寄り添いが、苦しみ・悲しみの淵から癒される復活の物語に寄り添わせていただくことと同義であることに気づきました。まさに、一人ひとりの復活体験に、現場でボランティア活動をする人も小教区から傾聴活動に出かける人も共感したのです。

心から喜びを感じるとともに、これからの教会のありよう・神の国の広がりとして見た思いが致しました。これは、遠い東日本の被災地に思いを寄せて祈ってくださる方々にも共感していただけるものでもあると思います。

今後も全国の善意ある皆様、世界中から支援してくださる皆様に被災地の状況を伝え続けて参ります。被災地のニーズが長期に及ぶことは間違いありません。神様が始めてくださったこの業を、わたしたち仙台教区、そして日本のカトリック教会は今後も歩み続けます。これまでの皆様のご支援に深く感謝申し上げますと共に、今後とも継続したお祈りとご支援をお願い申し上げます。

被災地の現状（抜粋）

◇仮設住宅からは経済力、体力、気力のある人たちが出て行っている。自立の道を歩み始めていることで、ある意味喜ばしいことだが、一方で、仮設住宅に残る人々は、出ていった人たちの後ろ姿と自分の現状を比べ、元気を取り戻すどころか、ますます引きこもってしまうなど、仮設住宅を取り巻く状況は厳しい。

◇復興計画が遅々として進まない。

計画そのものも提示できない自治体もあり、仮設住宅に残る被災者は将来への不安と行き場所のない怒りが募るばかりという状況。

◇被災地からは支援活動団体（NGO、NPO、各種のボランティア団体）が徐々に撤退し、その数は減っている。自分たちのことが忘れ去られてしまうとの不安と寂しさを被災者に与えている。

◇福島県の問題（県外への避難者を含む）はさらに複雑さを極める。

除染という課題が残っている限り、いつまでも将来の計画が立てられない。

故郷に戻れるのが早くとも5年以上先であるという現実。故郷に早く戻りたいという高齢者たちの希望が奪われ、生きる気力を失いやすくなっている。

作物や魚等に放射能が検出されると販売できず、生活が成り立たない。放射能数値が許容範囲内であっても風評被害に苦しめられている。

小さな子どものいる家庭では、家族が県内に残るもの、県外に避難するものに分かれ、生活が長期化する中で、夫婦間や親子間の分断が深まっている。

県内自主避難者は行政からの支援を受けられず、避難先と避難元との二重生活、経済的にも厳しい。避難者の実数すら把握されていない。

故カロロ・トマ神父を偲んで

久慈教会で主任司祭として46年間布教のために働いて下さったカロロ・トマ神父様が9月9日スイスにて帰天されました。追悼ミサが、11月18日午後2時より久慈教会で平賀徹夫司教の司式により行われました。知人、隣人、幼稚園の先生方、そして信徒など100余名が参列しました。

高齢とパーキンソン病に悩まされながらも司祭の役目を果たそうと最後まで私たちのためにミサをささげてくださったこと、感謝でいっぱいです。久慈教会に着任して地域に溶け込むためにライオンズクラブに入会し、教会を市民に親しまれる場にしようと、華道教室や書道教室に開放しました。

今でも思い出に残るのは、信徒がそろって行った侍浜海岸での野外ミサです。雄大な太平洋を眺めながら大きな岩場でのミサは今でも忘れることが出来ません。

信徒の霊名の祝日には家庭訪問をして下さり、家庭ミサをいたしました。

久慈教会の主任司祭として、久慈を愛し、海を愛し、芸術を愛した46年間でしたが、病状が進む中で転倒してからは急に元気がなくなり、スイスにお帰りになることになりました。お別れ会を盛大に行い、懐かしい多くの人たちに囲まれて嬉しそうにしていた姿が目に浮かびます。そして、6月9日に惜しまれながら故郷であるスイスに帰郷されました。

60年ぶりでのスイスでの生活はどのようにしておられたのか、少しは慣れたのかなと思っていた矢先の突然の訃報でした。驚きと悲しみの日々でしたが、久慈教会での長年の御苦労に感謝して多くの人たちと追悼ミサが出来たこと、本当にありがとうございました。

最後になりますが、多くの教会関係者の皆様からの弔意に対しまして御礼申し上げます。

（久慈教会　中野　信男）

略　歴

1928年1月28日 スイス・インメンブリュケ 生まれ
1955年4月3日 司祭叙階
1959年4月 岩手県花巻・水沢教会助任司祭
1966年4月 久慈教会主任司祭
2012年6月 スイスに帰国
2012年9月9日 スイス（ベトレヘム会）にて帰天 84歳

第35回 聖霊による刷新東北大会
「神に立ち帰れ 今は恵みの時」
2012年10月19日～21日
於 仙台市茂庭荘

大会の講師として昨年に引き続き赤波江謙一神父をお迎えし、「神に立ち帰れ、今は恵みの時」をテーマにご講話をいただきました。

北は北海道、南は沖縄からと全国各地から約50名の参加者がありました。大会二日目のミサ＝写真＝は、仙台教区司教総代理の小野寺洋一神父、ラトゥール神父が共同司式をしてくださいました。

赤波江神父の講話は「祈りの決意によって神に立ち帰る」「隣人への奉仕の決意によって神に立ち帰る」「愛の伝達によって神に立ち帰る」でこれらの実行のため聖霊の助けを願う必要性が強調されました。5・6名による分かち合いのグループでは、分かち合いのポイントを神父様が示してくださり講話を掘り下げ、深めることが出来ました。それぞれの体験談は、私の一つの悩みの解決への気づきを与えてくれました。友人との関わりでどのようにしたら良いか迷っていたのです。友人の力になりたいと願っていたのですが、相手の益となる差し出すべき「器の中身」が今の自分にはない、と気が付いたのです。

「証し」の時間では、東北の地に寄せる方々の想い、愛の聖霊の働きが伝わってくるものでした。今回の大会は私にとって、まさに「恵みの時」となりましたが、それは大会終了後も、パート2として続きがあったのです。大会が終わって週日のカテドラルの朝ミサにあずかったとき、数名の大会出席者がいて、ミサ後、その人達と分かち合いの続きがなされたのです。そこで私のこの悩みの解決策が示されたのでした。「器の中のもの」が準備されたのです。間をおかず、その友人から「会いたい」との電話をもらったのでした。神に立ち帰ることは、人と人との関わり方として具現化すると学びました。（北仙台教会 京野啓子）

〝信仰年〟を神に立ち帰るときに！

自分のうちに働いて下さる聖霊のささやきに敏感でありたいと願うようになり、30年。信仰年の節目に当たり、新たな気づきを求めて今年の大会に臨みました。

講話の中から「祈りを必要としている方々のためにとりなしの祈りをすること、特に自分と反りの合わない人のために祈ること、そうすることによって祈る自分が変えられていく」このことは以前実行してみましたが継続は困難でした。よほどその方の幸せを求める気持ちになれなければ…そのための力も必要な私でした。

次に「器にあるものを人に施せ…」わたしにとって大切な時間と労力を必要とする方々のために用いること。日常生活の優先順位再確認です。

三つ目の講話〝愛の伝達〟イエス様のユダへの思いは余りにも深く衝撃的で今少しずつ味わっているところです。

〝本物になりたい〟私にありがたい出会いをいただきました。

（元寺小路教会 小野照子）

信仰年、一信徒としての問いかけ
青森本町教会 佐井 総夫

信仰年にあたり、私たち信徒一人ひとりは、第二バチカン公会議公文書各宣言の再確認とその評価が、それぞれの立場において求められていると思います。第二バチカン公会議は、「教会のアジョルナメント（現代化や刷新）」を標語に進められてきましたが50年目の今、教会の歩みを顧みて、私たち信徒は何をし、何をしてこなかったのかを精査し、これから先の50年を見越しながら、次世代を担う若者たちに、私たちが受け継いできた信仰を引き継いでいかなければなりません。

奉献生活者の方々、そして若い世代の信徒の減少と教会離れが顕著になってきています。日本ではキリシタン時代や太平洋戦争中、ごくわずかな司祭と信徒同士で信仰や教会を守り続けましたが、主イエス・キリストを信じる信徒がいなくなってしまえば、その共同体である教会も無くなってしまいます。「アジョルナメント」を標語に進められた教会の現代化とは、信徒の交わりと共に社会に開かれた教会の実現と「福音宣教」の実践でした。私たち信徒は今一度、「信徒使徒職」の実践をそれぞれの立場において再確認し、実りある信仰年を過ごすことが大切だと思います。私は、カトリック学校の一教員として、また教会学校に携わる者として、そして家庭人として自分自身の使徒職を問い直してみたいと思います。

【ホームページ】「ΙΧΘΥΣ Εκκλοια」
http://w01.tp1.jp/~a287446192/T1.htm

＊仙台教区生涯養成講座＊

信仰年の取り組みの一つとして、昨年10月から始まった講座①第2バチカン公会議を学ぶ（講師・平賀司教・佐々木神父）②私の信仰とは（講師・横島神父）ともに毎月第3土曜日に元寺小路教会で行われている。

①の講座を受けている、川田治邦（一本杉教会）さんは、「カトリックの教義や福音については『聖書と典礼』や日曜日ごとの説教で教えていただいているが、カトリックの歴史的なことになると、私の場合はあまりにも知識が不足していました。この機会に素直に受講しようと思いました。

受講前に予習のつもりで、パソコンで調べ驚きました。ヨハネ23世の呼びかけで始まったこの会議の準備期間の長さ、参加人数の多さ、決定事項の多さなど大変大がかりな会議であったことがうかがえました。

私の興味は、この公会議を境として、何がどう変化したのかという具体的な内容が知りたいという事です。『第2バチカン公会議以降はこうなった』とは話の中ではよく聞きますが、以前はどのようであったのかは私は解らないのです。受洗して3年以上になるのに、知らないのは不徳と致すところであると思い、向こう1年間興味を持って真面目に受講していこうと思います」と、話した。

新園舎落成
川渡カトリック保育園

社会福祉法人カトリック児童福祉会(理事長 梅津明生神父) 川渡カトリック保育園(園長 中鉢洋子)は、園舎の老朽化に伴い、新園舎の新築工事が行われ、11月3日(土)新園舎の落成に伴い「感謝の集い」を開催した。

新園舎の落成に寄せて

11月3日、大勢のご来賓を迎え、神様のご加護の下、華やかな中にも厳粛に当園の改築記念「感謝の集い」を挙行することができました。

「神さまと、いつもいっしょ・・・」、山間の木のぬくもりが漂う新園舎に、天使たちの歌声が響きます。大好きな神さまへの感謝のうたを歌うことへの喜びと緊張、そして、このすばらしい園舎を作って下さった方々へ、自分たちの思いを込めた「手作りの感謝状」を贈るという大役も立派に果たすことができた子どもたち。堂々としたその姿に感激したのは、私だけではなかったと思います。何にでも関心や興味を示す子どもたちの安全のために、完成までの工程をよく見ることができるようにとの配慮から、囲いの中に作って下さった「のぞき窓」。子どもたちは、暑い中、一生懸命に働く人々の姿をどのように見つめていたのでしょうか。その結果の重みのある贈呈シーンではありました。

また、全職員が互いに連携し合い、自らが考え、自らが作り上げた「感謝の集い」でもありました。そして、時間外に練習を重ねたダンスや太鼓なども、職員が精一杯努力をし、真に感謝の気持ちを込めたパフォーマンスだったと思います。

すばらしい園舎を、すばらしい人々との関わりを、大勢の人からの愛をいただきながら、そしてこの日を迎えられたこと、こうした機会を創って下さった神様には心から感謝の気持ちで一杯です。

川渡カトリック保育園は、その前身が「上原聖母マリア保育園」で、1955(昭和30)年に戦後の開拓地であった上原地区に教会が置かれ、その後、地域住民からの要望の高まりから、1961(昭和36)年には、伝道師の岡田友治さんを園長として開園されたのが始まりでした。そして、1968(昭和43)年には、川渡地域全体からの要望を受けた形で、現在地に園舎を新築し、新たに川渡カトリック保育園として開園されたものであります。

翌年4月、私は新卒の保母として採用され、当時の真新しい園舎で初めての仕事に就きました。そして、早や40数年が経ちました。たくさんの皆様のご支援、ご協力をいただき、ここに、新園舎の落成を見たことは、唯一、40年前の園を知る現職にある者として、この上ない喜びであり、正に夢のような出来事として捉えております。

ただ、岡田園長は3年前に天に召され、また、主任保母を勤められた奥様のあい先生も、90歳を超えられて、現在は仙台の施設に入所されております。園の隣地にあるご自宅もすでに解体され、その跡を見て一抹の寂しさを覚える今日この頃ですが、園舎の改築に当たっては、「マリア像」や「ステンドグラス」のご寄付もいただき、カトリック保育園を象徴するような新園舎が完成しました。

新しい、広い、明るい園舎、そして、このすばらしい環境の中で、子どもたちも元気に、心豊かに育っていくものと確信しておりますし、なお一層の責任を感じております。保育行政も、幼保一元化、認定保育園や総合保育園、待機児童等々、いろいろな課題が山積し、困惑することもありますが、職員一同が、また新たな気持ちで保育の充実に努め、「選ばれる保育園」を目指し、これからの園の運営を図っていきたいと考えております。

（園長 中鉢 洋子）

第25回東北地区カトリック学校教育研修会

研修テーマ「震災後の復興期におけるカトリック学校の果たす役割」と題し、第25回東北地区カトリック学校教育研修会が八戸聖ウルスラ学院中学・高等学校において、11月9日・10日の両日に行われた。遠く新潟、秋田県から、そして仙台教区に属するカトリック学校から総勢102名の教職員が参加した。

当初この研修会は昨年開催される予定で準備が進められていたが、一昨年の東日本大震災および福島第一原発の事故に伴い、開催が延期され、大会テーマの変更もあって、ようやく今回の開催に至った経緯がある。

基調講演は、カトリック新潟教区長で、カリタスジャパン責任司教の菊地功司教にお願いした。菊地司教＝写真＝はアフリカでの福音宣教の体験と重ねあわせながら、世界のあらゆるところで起こる災害、戦争などで被災した人々の最大の悲劇は、時を経るにつれて忘れ去られることである。私たちカトリック学校にできることは忘れていないということを常に発信していくことではないかと訴えられた。また、信仰年にも触れ、信仰の証し、奉仕などを通して〈カトリック学校としての証し〉の大事さも訴えられた。

その後の分科会では、各校における「東日本大震災への取り組み」が分かち合われた。

翌日は宗教部会、生徒指導部会、進路指導部会、教務部会、生徒募集対策部会の5分科会に分かれ、それぞれの学校が取り組んでいる課題について分かち合い、カトリック学校における福音宣教の豊かさを改めて認知する機会となった。

最後は仙台教区長平賀徹夫司教のミサで締めくくられた。

今回の研修会を通して学んだ最大の成果は、少子化や司祭、修道者の高齢化の課題を抱える東北地区のカトリック学校ではあるが、互いの学校で行われている教育活動に誇りと自信を持ったカトリック学校に勤務する教職員が、あらたな『絆』で結ばれたことである。

（八戸聖ウルスラ高 教頭 里村 智彦）

小さな教会の大きなコンサート

カトリック原町教会

12月8日(土)、カトリック原町教会でクリスマスコンサートが行われました。音が悪かったパイプオルガンが修理されたことのほかに、あの大震災から1年9ヵ月が過ぎるのに、復興が遅れている南相馬市を元気にする意味もありました。

演奏者は、有名なパイプオルガニストで南相馬市に住む青田絹江さん、そしてソプラノ歌手である柿沼葉子さん=写真=。観客は、小さな原町教会の聖堂が満員になるほどで、約70人が集まりました。入場無料で演奏者のお二人はボランテアで演奏してくださいました。

オルガンの曲は、バッハ、ヘンデルの曲など、ソプラノの曲は、「アヴェ・マリア」、「アメイジンググレイス」など、そして最後には「来たれ友よ」、「しずけき」の全体合唱で終わりました。

体が震え鳥肌が立つ最高の感動の1時間でした。

今も写真から自然と二部になった全体合唱が聞こえる気がします。（原町教会 高野郁子）

ちょっぴり早めのクリスマス・コンサート&イルミネーション点灯式

12月に入ると、仙台市宮城野区東仙台にある光が丘スペルマン病院には、色とりどりのクリスマスイルミネーションが灯る。これは、市民グループ「春風の家」（代表小野敬子＝一本杉教会）の主催によるもの。

12月1日(土)午後2時から、東仙台教会の聖堂には、70人ほどが集まり、宮城県立三桜高校の合唱部=写真=の歌声に耳を傾けた。

つづいて、今野家なにも・かにもさんの漫才、今野家 東(あずま)さんの落語に耳を傾けたっぷりと笑った。

午後4時半から、スペルマン病院の玄関前に集まり、クリスマスソングを歌い、同病院の理事長鷹觜達衛神父のあいさつの後、エメ神父が、散水しイルミネーションを祝福した。

カウントダウンに合わせて、サンタの帽子をかぶった2人の子どもが点灯のスイッチを押すと、あたり一帯にイルミネーションが灯り、歓声がわきあがった。毎年新しいイルミネーションが追加されるが、今年は、馬屋の聖母子と天使をかたどったものが追加された。

道行く人たちもしばし足を止め眺めていた。

「春風の家」は、その前身である「ホスピス設置を願う会」が、スペルマン病院にホスピス病棟を開設したことでその目的を果たし、以後ホスピスの応援を柱にがん患者さんの相談に応じる活動などを行う「春風の家」を立ち上げ、現在は、抗がん剤の副作用で脱毛に悩む女性のため、カツラの貸し出しも行っている。

仮設でクリスマス会

仙台市若林区荒井東通仮設住宅の集会所には、「カリタス若林」（一本杉・畳屋丁・西仙台教会合同）の名称で毎水曜日訪問しカリタス・カフェの活動をしている。12月19日(水)、同仮設自治会と合同でクリスマス会を行った。

仮設の中で大正琴を練習している方々の演奏や、世界の名画でつづるクリスマス物語のスライドの上映、サンタクロースからのプレゼント=写真=などがおこなわれた。

いつもよりちょっぴり豪華なお菓子とコーヒーなどの飲み物で楽しい時を過ごしていただいた。

同仮設には、若林区荒浜地区で津波の被害に遭った方々が約200世帯ほどが居住しているが、いまだに移転先が決まらず不便な仮設暮らしを続けている方々が多い。今後も息の長い支援活動が望まれる。

ピレネー山脈の麓の小さな発電所

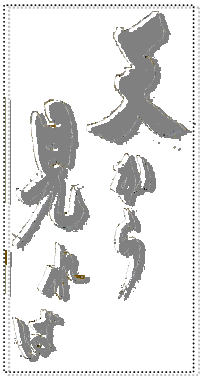
去る10月下旬、ルルドの街の中にいた。皆様ご存知の聖ベルナデッタの村である。街の中をポー川が蛇のようにU字にうねり、翡翠色の水は溢れんばかりに滔々と流れていた。その水量と水流の速さに驚きながら川に沿って下っていくと、何と水力発電所があった。ロザリオ大聖堂の直ぐ上流側である。ピレネー山脈を駆け下った水量と水流を利用して、わざわざダムを作ることもなく、恐らく数百kW程度かと思われる発電がなされていた。

フランスの旅を通して、原子力依存度の際立って大きいこの国で、フランス人それぞれがエネルギーについてはっきりした意見を持っているのに驚いていたが、南仏プロヴァンスのなだらかな丘陵地帯に散見した風力発電のプロペラと共に、この小さな水力発電所が強く印象に残った。

地球を大事にする会　松永 利昭

推薦映画2題

ドキュメンタリー映画



主人公は小学校三年生の春休みに製材業を営む父を手伝っている時、機械のベルトに巻き込まれて両腕を失ってしまいました。14歳の時、近所のすすめもあり、両親と共に京都に住むある尼僧を訪ねました。その尼僧もまた、17歳の時、養父が一家五人を斬殺するという事件の巻き添えとなり両腕を失ってしまいました。尼僧は、主人公の両腕を失ってからの身の上話をすべて聞いた後、「分かった。私の弟子になりたかったら、三つだけの条件がある」と言いました。

一つは、堺から京都まで一人で来なさい。そして、今までは足を使っていたかも知れないけれども、これからは口を使いなさい。そして、三つめは、絵を描きなさい、勉強しなさい、と。そこから尼僧の慈愛に満ちた修行が始まります。主人公は尼僧の生き方に接して人生に開眼、後ろ向きだった心が大きく転換していきました。

自分らしく生きるとは？幸せとは何か？観るものの心を揺さぶる感動のドキュメンタリー。

映画上映と監督入江富美子さんの講演が行われる。

2月3日(日)楽楽楽ホール（仙台市太白区文化センター）

12時30分開場、13時上映開始

15時　講演

主催・仙台宮城野区倫理法人会

後援・河北新報社、Ｏｈバンデス、カトリック仙台壮年の会

入場料2，000円

愛とは　生きる力

レ・ミゼラブル

カトリック中央協議会広報推薦

フランスの文豪ヴィクトル・ユーゴーの大河小説『レ・ミゼラブル』。ミュージカル劇として27年間という驚異的なロングランを続け、延べ6千万人を超える観客を動員した不朽の名作が、このたびミュージカル映画としてスクリーンに登場した。時は19世紀初頭のフランス。王政派と革命派の対立いまだおさまらぬ世相を背景に、映画は、生活苦の中で飢えに苦しむ姉の子を見かねて盗んだ1本のパンのため19年もの徒刑に服したジャン・ヴァルジャンが仮出獄する場面から始まる。長い監獄暮らしの中で人間不信と憎悪の塊となったヴァルジャンは、第一級の「危険人物」として獄を出る。誰からも相手にされず就労も拒絶され、神を呪い、絶望と怒り、不正義に煩悶する彼が息も絶え絶えでたどり着いたのは、ディーニュの町の粗末な司教館だった。貧しい司教館の貧しい司教。しかし罪人を温かく迎えたミリエル司教は言う。「ようこそ来られた、兄弟よ。ここには何もないが、持てる物は分かち合わねば」。神に感謝をささげた後、乏しい食べ物を分け合い、快く一夜の宿を提供する老司教。しかし皆が寝静まったその夜、悪心にそそのかされたジャン・ヴァルジャンは司教館から銀の食器を盗んで逃亡を図るが、その場で官憲につかまってしまう。司教の前に引き出された彼は、そこで思いもよらぬ言葉を聞く。「彼は盗んだのではない。私があげたのだ」と。そして「これもあげたはずだよ、忘れたのかな。正しい人になるように」と、諭しの言葉と共に高価な銀の燭台一対を与えられたとき、真の回心がジャン・ヴァルジャンに訪れる。十字架の前でひざまずき、涙を流して「新しい人」になることを誓うジャン・ヴァルジャン。8年後、市長となって我が身をささげて人々に献身する主人公。人の善性を信じられず執拗に彼を追い回し続けるジャベール刑事、金のためならなりふり構わぬ宿屋の夫婦、若い恋人たちの純愛。姦計と暴力、そして死と魂の救済…。この作品には人の「生」につきまとう様々な人間模様が描かれている。しかしその基底を流れるのは、神への信仰に基づく信頼と受容、赦しと祈り、そして根底からの回心である。「人は新しくなれる」、そしてそれは善意と受容を介しての神との「決定的な出会い」によるものであることを、この重厚な映画は強調する。スピードと簡便さがもてはやされる今日、特に若い世代の人々に観てほしい映画である。

（中央協 広報 推薦文より）

12月21日より全国ロードショー【一般映画館】

新刊案内

「雄大剛健・人類愛　粟野健次郎教授と土井辰雄枢機卿」

著者／小野寺永幸　発行／奥州出版

定価／1，000円（税と送料はサービス）

粟野健次郎教授は一関出身。旧制一高（現東大）で5年、旧制二高（現東北大）で40年、精神雄大、躯剛健の人材育成をし、夏目漱石の「三四郎」の広田先生のモデルと言われている。「世俗を超え、深山の大木たれ」「リーダーなるもの、社会の底辺に目を向けよ」といい、多くの学生に慕われ現東北大学に粟野観音が建てられている。

土井辰雄枢機卿は仙台出身。旧制二高英文科で粟野教授から英語を学び、卒業後、司祭を志し、ローマのプロパガンダ大学で哲学と神学を学び、1921年に29歳で仙台にて司祭に叙階。四ツ家、一関、気仙沼、会津若松の教会で司牧の後、ローマ教皇使節の秘書をへて、1938年東京大司教。1960年に日本初の枢機卿に親任された。誠実、温厚、祈りの人。

縁あって、この本の巻末に私（神父・高橋）は「岩手県南（水沢・大籠）、宮城県北（米川）のキリシタンと後藤寿庵について」記事を載せさせていただきました。

どうぞ手に取ってご覧ください。

申込み先／カトリック水沢教会・神父高橋　昌（TEL/FAX　0197-25-7707）

著者 小野寺永幸氏は私（高橋昌）の一関中学時代の恩師。